一ページ随筆

詩と左右の脳

樋口宗司

プロの歌手を目指して著名な作曲家に師事したことがあるという友人に頼まれて詩を書く約束をした。彼は自分の店を持って十年の記念にリサイタルを開くという。同人誌に小説を載せている私が詩を書き、彼が曲をつけるという話である。私はグラスとマイクを手に、胸を張って請け合った。しかし、約束の時がきても一行も書けない。以来、詩と小説の違いについて、考えることが多くなった。

私の生業は薬屋で、大学病院の医師と組んで仕事をする機会が多い。医師会の集まりなどで前座に自社の新薬をPRした後、専門医の講演に耳を傾ける。内科、外科、婦人科等、あらゆる領域の話を聞くが、最近最も進歩が目ざましいのは脳に関する研究である。脳は長い間ブラックボックスであったが、CT、更にMRIという機器でその小さな襞の一つ一つまでが見えるようになった。更に、まだ日本には数台しかない巨大な装置を使うと、脳の細かい働きも判る。このPETという装置は、ヒトに本を読ませると後頭部が盛んに働き、暗算をさせると左の脳が、そして音楽を聞かせると右の脳が活躍している様子を、手にとるように見せてくれる。計算や言葉などの論理的作業は左の脳が、音や絵や感触などは右の脳が担っていて、互いに協力しあって高度な知的活動が可能になっているのである。そこでテーマの詩についてだが、左右どちらの脳が重要であろうか？

脳には言語を司る中枢が二箇所あって、話したり書くことと、聞いたり読むことは別々の部分が受け持っている。前者は頭頂近くに、後者はその少し後部にあるが、それらはいずれも左の脳に存在する。従って言葉を用いる詩は、それがいかにリズミカルであったり絵画的であったとしても、疑う余地なく左の脳が主役である。だが、小説はいざ知らず詩は左の脳だけで可能であろうか。

左の脳に出血や血栓をきたし、言葉や日常生活は不自由になったものの、彫刻や作曲は変わらずに続けられた芸術家がいるという。これは、美術や音楽は右の脳だけで可能だという証明である。しかし、優れた詩人が脳卒中等で倒れたら、恐らくその能力を保つことは不可能だと私は思う。右の脳の直感と、左の脳の思考とが協調して初めて詩的イメージが形成される。すなわち、左右の脳の結合の極みとして詩が存在するのではなかろうか。ここにまた、詩が多くの人に受け入れられにくいひとつの理由があるように思われる。音楽や絵のようにフィーリングだけでは済まないし、さりとて小説のように理解も容易ではない。作ることも難しいが、鑑賞することもまた難しいわけである。だが、神から授かった左右の脳をフルにつかった最高の芸術が詩である、とも言えそうな気がする。

詩を作りたくてもできない私だが、聞きかじりの大脳生理学の知識で詩論を試みた。的外れであればお許し願いたい。